

# 目利きとしての腕を磨く

## 第1回宝石の品質判定講座が好評

16点のサンプル用意して 次回は4月15日に

JGS

(社)日本宝石協会(JGS、伊藤彰理事長)では、新しいワークショップ「宝石の品質判定講座」を始めることとなり、第1回目の講座が3月26日午前10時から午後3時まで、京橋の東京スクエアガーデンセミナールームで開かれた。

今回取り上げた宝石はルビーで、講師は諏訪貿易会長で日本初のGIA・GG取得者の諏訪恭一氏が務めた。全国から15名の受講者が集まり、総論としての「宝石の見方」の講義を受けたあと、4グループに分かれて主催者が用意した16点のルビーのサンプルと受講者が持ち込んだルビーを使って品質判定の実習を行った。修了後には全体のコメントと修了書の交付があった。

セミナーは伊藤理事長



東京・京橋で開催された宝石の品質判定講座(中央奥で立っているのは伊藤理事長)

の「当協会は宝石の素晴らしさを発信すると同時に流通環境の整備、信頼性の向上を目指して活動しているが、この講座を通じて宝石のプロとしてお客様に信頼され、自信を持って宝石の情報を伝え、宝石と販売者の価値を高めるためのスキルを身に付けていただきたい」とのあいさつで始ま

り、講師の諏訪氏が「宝石の見方」について講演した。諏訪氏は、気の遠くなるほどの時間をかけて大自然が産み出した宝石についての定義として、美しいこと、身に着けられること、価値が長く保てることが大前提で、人間が意図して作れないものというところが最大の魅

力と説明したほか、宝石を判定する七つの要素(①種類②産地③処理④姿と輝き⑤濃淡と透明度⑥欠点⑦サイズ)を項目ごとに具体例を示して解説した。宝石学はベルヌイが合成宝石を作った時、石を見分ける必要から始まったこと、宝石は流通するもので古いも新しいもないこと、合成石は量産が効くので希少性がなく安いこと、宝石は光をつまむ技術、形の良さ、カットのバランスの良さなどを含めたパフォーマンスの良さが重要な点とした。

いた。実習の後半では受講者が持参したルビーを判定した。諏訪講師は「判定した石はマスターストーンとして使えるので、有効に使ってほしい」とアドバイスした。

実習のために用意された16点のサンプルはミャンマー産、無処理、加熱、タイ産加熱石で、受講者は肉眼やルーペ・顕微鏡を駆使して設定された時間内に品質判定の技術を磨いた。実習には諏訪講師と伊藤理事長がアドバイザーとして付き添い、さまざまな質問に答えて

同協会では、これまで合成石の混入、加熱処理による変化、宝石の色の表示問題などのシンポジウムや勉強会を開いており、消費者に信頼される目利きの宝石商になる場を提供してきたが、このルビー講座は4月15日も実施される。

講座受講申し込み先  
日本宝石協会TEL03-5812-4785

<時宝光学新聞許諾>

※この記事は、時宝光学新聞社の許諾を得て転載しています。

※無断で複製、送信、出版、頒布、翻訳、翻案等

著作権を侵害する一切の行為は禁止されております。